

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12158

研究課題名（和文）急性期病院に入院する認知症高齢者の転倒予防のためのケアプログラム

研究課題名（英文）Development of fall prevention care items for the elderly with dementia conducted by nurses in acute hospital

研究代表者

福間 美紀（FUKUMA, Miki）

島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授

研究者番号：40325056

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、急性期病院の認知症高齢者転倒予防ケアモデルを開発することを目指して病院の看護師を対象とし、認知症高齢者の転倒予防ケア項目の実践について調査し、信頼性妥当性のある転倒予防ケア項目の抽出とケア構造を明らかにし、転倒予防ケアモデルを開発することを目的としたデルファイ法により129項目のうち、コンセンサス基準に基づき121項目同定した。さらに、全国の病院看護師を対象とし、因子分析の結果、11のサブスケール、66項目が抽出され内的一貫性、項目妥当性、基準関連妥当性が証明された。この尺度は、病院に入院する認知症高齢者の転倒予防ケア項目として活用できると考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者は、健康な高齢者と比較し、転倒リスクが高く一度転倒すると重症化するリスクも高いことが明らかとなっている。本研究結果では、「リスクが高い時期に可能な限り行動を共にして認知状態を把握する」、認知機能や、移動能力だけでなく、高齢者自身の判断の適正性や入院の原因となった疾患のマネジメント、訴えることができない症状までもキャッチすることで転倒予防につなげていると言った予防ケアの構造を明らかとした。この結果は、病院において認知症高齢者が権利擁護されながら、転倒予防ケアを享受され、安心して療養するためのケア指針を示すことができると考える。

研究成果の概要（英文）：The objective of the present study was to develop a “fall prevention care items for the elderly with dementia conducted by nurses in acute hospital”, and to test the scale's reliability and validity. Out of 130 items, 118 items were identified based on the consensus criteria by the Delphi method aimed at extracting and clarifying the care structure of certain fall prevention care items and developing a fall prevention care model. Exploratory and confirmatory factor analyses identified 11 core factors and 66 care items. The items were extracted, and internal consistency, item validity, and criterion-related validity were proved. These findings suggest that the items can be used as an indicator of fall prevention care items for the elderly with dementia conducted by nurses in acute hospital.

研究分野：基礎看護学

キーワード：認知症 高齢者 転倒予防ケア ケア項目

## 1. 研究開始当初の背景

2025年には700万人を超えると推計されている認知症高齢者は、認知症を理由だけでなく、身体合併症による医療機関への入院する機会が増加しており、今後も伸展することが予測される。認知症高齢者に対して入院環境であっても安全に療養し、本来の生活の場に復帰できるように看護を提供する必要がある。認知症高齢者の安全に関する重要な課題の一つである転倒は、健康な高齢者の1.74倍のリスクがあり<sup>3)</sup>、重度の転倒に伴う外傷の発症リスクが2.13倍と高くなる<sup>4)</sup>。そのためさまざま転倒リスクを予測するための転倒リスクアセスメントツールが開発されている<sup>5-9)</sup>。転倒リスクアセスメントツールによる潜在的な転倒ハイリスク者のスクリーニング後の転倒予防などの対策が重要となるが、急性期の看護師は防ぎようのない転倒があるなど活用上の限界や効果的な活用がなされていないという報告もある<sup>12)</sup>。特に、認知症高齢者では、加齢に伴う虚弱だけでなく、入院環境などによる要因や突発的な行動をとる、興奮して動き回る、看護・介護援助に対して抵抗するなど行動にBPSDが複雑に絡み合い転倒が引き起こされると考える。

そのため、認知症高齢者には転倒予測のための一人一人の疾患や症状による苦痛やニード、その人のこれまでの生活歴から生じるニードを探索して、そこに介入するといった転倒リスクの分析や個別プランの作成などが進められているが、認知症高齢者の転倒リスクを低減させるエビデンスのあるケアモデルは示されていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、急性期病院に入院する認知症高齢者が安全に療養生活を過ごすための転倒予防ケアモデルを開発することを目指して以下、3つの目的で研究を行った。

(1) 認知症高齢者の転倒リスクが高まる行動とその対処についての質的分析と先行研究に基づいた認知症高齢者の転倒危険行動についてのケア内容を明らかとする。

(2) 全国の病院の認知症看護認定看護師と老人看護専門看護師を対象としてデルファイ法で検証を行い、転倒予防ケア項目を抽出する。

(3) 急性期病院の看護師を対象とし、認知症高齢者の転倒予防ケア項目の実践について調査し、信頼性妥当性のある転倒予防ケア項目の抽出とケア構造を明らかにし、転倒予防ケアモデルを開発する。

## 3. 研究の方法

3つの研究目的別に研究方法を以下に示す。

(1) 病院で3年以上の実務経験のある看護師10名を対象とした転倒予防ケアのプロセスに関する語りから質的帰納的分析を行った。この分析によって抽出されたケア項目を補完するため先行研究を分析した。

(2) 日本看護協会のホームページより全国の病院の認知症看護認定看護師と老人看護専門看護師のリストを作成し、悉皆調査を行った。研究デザインはデルファイ法を用いた量的記述的研究とした。全国の老人看護専門看護師及び認知症看護認定看護師960名中281名を対象に、郵送にて質問紙調査を2回行った。各項目のコンセンサス基準は、先行研究を参考に実施度の平均値を4.0以上、重要だと判断した者の割合を80%以上と設定した。

## 4. 研究成果

(1) インタビューによる質的分析の結果、分析の結果、756の切片から141のコードを抽出

し、33 のカテゴリ、10 の大カテゴリに集約された。

看護師は、患者の〈生活状況〉〈移動によるリスク〉〈認知機能の程度〉を把握していた。このような患者情報から〈転倒につながる要因〉〈病状による影響要因〉を査定していた。また、意思疎通できない患者の〈離床の意味を探求〉していた。患者には、〈健康な部分に働きかけ〉ながらも、〈生活パターン〉や〈入院環境〉を調整していた。一看護師だけの介入にとどまらず、〈一丸となって転倒リスクに対応〉していた。

141 のコードと文献検討の結果、項目の粒度を検討したのち、専門看護師のスーパーバイズを受け、104 項目を原案とした。

(2)129 項目中 121 項目の同意となった。認知症予防ケア項目としては、「生活状況を査定し整える」「移動によるリスクを査定し整える」「認知機能の程度を査定しケアする」「原疾患やフレイルを査定し緩和を図る」「患者の視点で入院環境を査定し整える」「患者の情報を共有し一丸となってケアする」「患者の尊厳を擁護する」に大別された。センサーマットや身体拘束に関する項目などが適合除外となった。

本研究によって抽出された認知症高齢者の転倒予防ケア項目は、認知症高齢者の認知機能や移動能力の査定だけにとどまらず、認知症高齢者の意思や生活状況にも焦点を当てることで、認知症高齢者の尊厳を維持しながら安心して入院治療するための看護実践につなげることができると思う。

(3) 全国の 53 病院の看護師 1222 名中、有効な回答のあった 1211 名を分析対象とした。因子分析の結果、11 のサブスケール、66 項目が抽出された。抽出されたサブスケールは「リスクが高い時期に可能な限り行動を共にして認知状態を把握する」8 項目、「認知症高齢者の転倒を予防するため組織的に活動する」12 項目、「認知症高齢者自身の移動に関する判断が適正であるか査定する」11 項目、認知症高齢者が安心して生活できるようにケアする」7

	α	平均値	標準偏差
第1因子：リスクが高い時期に可能な限り行動を共にして認知状態を把握する (8項目)			
25	0.954	3.84	0.67
26			
27			
28			
29			
23			
24			
30			
第2因子：認知症高齢者の転倒を予防するため組織的に活動する (12項目)			
106	0.897	3.86	0.58
105			
109			
97			
101			
99			
102			
96			
103			
107			
108			
104			
第3因子：認知症高齢者自身の移動に関する判断が適正であるか査定する (11項目)			
36	0.918	3.88	0.54
39			
35			
37			
40			
38			
45			
46			
43			
44			
42			
第4因子：認知症高齢者が安心して生活できるようにケアする (7項目)			
68	0.910	4.09	0.52
71			
67			
72			
69			
73			
70			
第5因子：認知症高齢者の家族の協力を得る (4項目)			
113	0.910	3.45	0.83
112			
114			
111			
第6因子：摂食のことでない身体状態を把握する (4項目)			
78	0.918	4.12	0.57
79			
80			
77			
第7因子：病状の中にあるも認知症高齢者を擁護する (7項目)			
120	0.905	3.72	0.62
118			
117			
119			
121			
115			
116			
第8因子：認知症の症状を評価する (4項目)			
55	0.899	3.83	0.66
54			
49			
48			
第9因子：入院になった原疾患の病状を把握する (3項目)			
75	0.916	4.24	0.53
74			
76			
第10因子：認知症高齢者のタイミングを見計らって排泄誘導する (3項目)			
91	0.871	3.92	0.68
92			
93			
第11因子：リスクが高い時期に可能な限り行動を共にして精神症状を把握する (3項目)			
31	0.924	4.02	0.66
32			
33			

項目、「認知症高齢者の家族の協力を得る」4項目、「訴えることのできない身体症状を把握する」4項目、「病院の中にあっても認知症高齢者を擁護する」7項目、「認知症の症状を評価する」4項目、「入院になった原疾患の病状を把握する」3項目、「認知症高齢者のタイミングを見計らって排泄誘導する」3項目、リスクが高い時期は可能な限り行動を共にして精神症状を把握する」3項目で構成された。クロンバックの係数は0.871～0.954で内的一貫性が確認された。GP分析、IT分析から尺度から取り除く項目は認められず、項目妥当性は検証された。さらに、看護師経験、各種研修等の基準変数を用いて分析した結果、基準関連妥当性も証明された。

本研究では、認知症高齢者の移動能力や認知機能の査定だけにとどまらず、「訴えることのできない身体症状を把握する」「入院になった原疾患の病状を把握する」と言った、病院での治療を受ける認知症高齢者の身体状態をアセスメントする項目や、急性期病院で問題視された、認知症高齢者の人権擁護についても焦点が当てられたことが特徴として示された。この尺度は、まさに急性期病院で加療中にある認知症高齢者の転倒予防ケアとして全人的にアプローチできる尺度構成となっているため、今後の活用性が期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Fukuma M, Tsumoto Y, Miyamoto M, Sakane K, Tamagawa Y, Uchida H.
2. 発表標題 Extraction of care items to prevent falls of elderly people with dementia in acute hospitals (1st report) .
3. 学会等名 The International Nursing Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fukuma M, Tsumoto Y, Miyamoto M, Kobayashi Y, Sakane K, Sakki M
2. 発表標題 Development of “ items for a fall prevention care scale ” for the elderly with dementia to be implemented by nurses in acute hospitals
3. 学会等名 7th WANS ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小林 幸恵  (Kobayashi Yukie)  (20325062)	西九州大学・看護学部・教授    (37201)	
研究分担者	内田 宏美  (Uchida Hiromi)  (30243083)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授    (15201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	津本 優子 (Tsumoto Yuko)  (30346390)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・教授  (15201)	
研究分担者	坂根 可奈子 (Sakane Kanako)  (40559267)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・助教  (15201)	
研究分担者	宮本 まゆみ (Miyamoto Mayumi)  (80551746)	島根大学・学術研究院医学・看護学系・講師  (15201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関